西谷村聞書

杉原丈夫

昭和二十九年八月私たちの一行は、ダム工事で水没する予定地の大野郡西谷村小沢及び下秋生を訪れた。以下はそのときの民俗学関係の聞き書きである。ついでながら工事は予定通り進行し、これらの村は今は湖底に永遠に眠つている。

小沢にて

村山保氏談（八月十日夜）

一　うばが嶽の頂上近くにうばが岩と称する美しい岩のほら穴がある。入口は小さいが中は広い。ここに山うばが住んでいて、はたを織つていた。

あるとき山うばは番道久右衛門のうまやから一つ毛（黒一色）の牛をひつぱつていつた。牛はまがり角（古沢家）の所で一声ないた。それで一つ毛の牛は飼つてはならぬといわれている。（二〇、二六、三五参照）

二　いま学校の立つている場所には、むかしお宮の拝殿のようなものが七つあつて、七堂といつた。村山氏が子供のときにも二つ残つていた。しかしこれは学校を建てるときこわした。この拝殿に神だか仏だか知らないが本体が三体あつた。これは拝殿をこわしたとき本殿に収めた。（つまり本殿の神体のほかにこの三体を加えた。）これはもと川向の宮滝という所にあつたが、水が出るので（大水のとき水をうけるので）今の山へ移した。

三体のうち一体は女神で金ぱくが塗つてあつた。あるときぬすびとがこれを金と思いぬすんでいつたが、途中で重くなつたので川の「かんばおき」に棄てた。その夜かぎ持のみすけ（宮本）のぢいさんに夢の告げがあつた。ぢいさんが翌朝かんばおきへ行つてみると、川の中から後光がさしていたので、拾い上げて帰つた。

十二月九日の山まつりの日には村中の者が甘酒をつくり、このぬすまれた神様にそなえてお祭りをする。この女神はお産の神様である。だから小沢ではお産で死んだ人は一人もない。（一八参照）

三　平将門は温見にいたが、殿様に攻められたので、山をこえて小沢へ逃げてきた。そしてここで主従七人が殺された。そのとき胴は温見に行き、首だけがこちらへ残つた。七人の死がいを埋めた所を七人塚という。しかし今は塚の形は残つていない。

小沢川の川上に「逃げぼら」、その下流に「かくれぼら」、その更に下流に「往生ぼら」がある。将門が逃げ、かくれ、往生した所である。（ほらというのは小さい谷のことである。）

巣原の平家平に平家の本拠があり、温見にはその分派が、小沢にはそのまた分派が来たといわれる。（一九参照）

四　むかし中島と小沢の間にははつきりした境界がなかつた。そこで中島の殿さんと小沢の殿さんが境界を定めることになり、朝両方から出発して出会つた所を境にすることにきめた。ところが中島の殿さんは馬をもち、小沢の殿さんは牛しかもつていなかつた。それで中島の殿さんは安心し、小沢の殿さんは心配なので夜のうちに出発した。そのため両人は中島をちよつと出た所のあみだ坂で出会つた。あまり中島に近いので、中島の殿さんは思わず「なんまんだ」と称えたので「あみだ坂」とい

う。しかしあまり中島に近いので少しもどつてくれというて牛を押し返して黒当戸の所までもどしたら牛が動かなくなつた。よつてそこを牛谷という。

五　七人塚の近くに「まとば」がある。七人塚から見るとまとばは正面に見える。むかし殿さんがここで弓の練習をした。まとばの更にむこうに「やのきし」という所がある。矢のとどいた一番はてという意味である。

いまお宮のある所はむかし殿さまのいた跡という。お宮の横にとのいけ（殿池）というしようず（清水）がある。これは学校の水になつている。みのを着たり、かさを着たりしてこの殿池をさらえると雨が降るという。殿さまやしきという地名もある。

六　小沢に七人の旧家がある。

みすけ（宮本）がんり或はがんりきと称する。

ごろべ（平尾）大平と称する。大きい平尾という意味である。

ほうき（宝寄）

すけえもん（中山）

みなみ（坪田）

田中彦べ

中山よえもん（三〇参照）

七　玉みその造り方。豆をつぶして玉にする。わら七本をもつて、つとわらのような形にみそ玉四つを包んでほす。これを「やすじ」という。わらが七本しかないのに八すじとはこれいかになどと、たわむれにいつている。乾くころにかびがつく。特にこうじなどは用いない。この玉みそを塩にまぜて使う。

沖島新丸氏談（八月十日）

八　むかしそうぐら（惣倉）というものがあり、大事なものをみないれておいた。あるとき悪者が来て軽いものはもつて行き、あと火をつけたため村の古い記録はなくなつた。（一八参照）

田口のおばさんの話（八月十日）

九　山うばが村に緒をうみに来た。うんでためたが、あまりたまらなかつたので「つむなか、ようきた。」といつたら、山うばは「ひんぐり、あばよ。かせをあけてみよ。七かせ半あるよ。」といつて去つた。

「つむなか」とは緒が十分たまらぬこと、「ひんぐり」とはひえの上に米をならべためしのことである。ひんぐりなどいらないという意味である。（二七参照）

一〇　むかし拝殿が二つあつた。本堂に近い方を中堂といつた。ここに白い髪、白い着物の怪物が出て、年に一人づつ娘を供えさせた。だから今でも子供をおどかすのに「なかんどの白」という。これは新助のばあさんが白毛で、いつも中堂でぼろのつぎなどしていたから、子供がこわがつたのだともいう。

一一　たて横ともに麻糸のものを「ぬの」といい、たてが麻、横がもめんのものを「さつくり」という。

一二　十二月二十三日（大師講）。おかゆをたく。このあとを洗わずにおき、蠅がはいるのをまつて、そのままふたをしてやく。そうすると蠅がいなくなるという。

正月十五日。あずきがゆを木のまたにおく。実のりをよくするためである。

一三　ひえの種類。どうしよう（わせ）、にぎりこ（中手）、しろびえ（おく手）。

村山氏の祖父の話（八月十日）

一四　小沢に天狗のあそび木が二本あつた。一つは学校のそばのひのきであり、一つは細小谷のもみの木であつた。別段枝ぶりが変つていたわけではなく、ただその附

近にその種の木がなかつたからである。この附近へ木を切りに行くと投げとばされるので人は近づかなかつた。

天狗のあそび木は山の神の遊び木ともいう。

一五　そまごや平に「のづち」がいた。太くて短い蛇である。

一六　婚約のひろうを「ねきりざけ」という。

一七　田口（小平）の倉に水がついたとき、つがいの白ねずみが逃げていつた。それからだんだん所帯が悪くなつた。

宮本見助氏談（八月十三日）

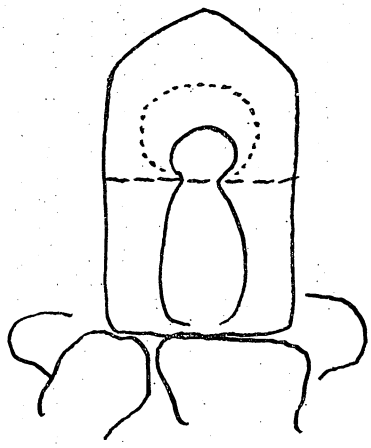
一八　むかし池田の野尻きよもんという悪いやつが村の惣倉に火をつけ、御神体（十一面観音）をかついで逃げ、他の三体は村の杉原の杉の木の横にぶらさげておいた。しかし途中で御神体が重くなつたので「しようの橋」から落した。（二、八参照）

お宮に小さいこま犬が二対ある。悪者がきたとき、この犬がないたという。

筆者は宮本氏と一しよにお宮へ行き、神体を見せてもらつた。ずしに入れて三体あり、左からびしや門、不動、十一面観音である。びしや門と不動の間に小さい庚申（三びきの猿）がある。賊が川に投げたのは一番右の十一面観音である。お産の神様は左のびしや門である。白塗なので村の人は女神であるといつている。（三六参照）

もう一つずしがあり、これにも別の十一面観音がはいつている。その足もとに小さい人形がたくさん置いてある。この観音の前にこま犬が二対ある。

一九　宮本氏の所有地の杉原の中に宮本氏の祖宅である平将門の墓がある。（第一図参照）。右に「□永三年八月」左に「□禅定門法界」とある。将門の墓の前に宮本家の墓が二基ある。いずれも奇形の自然石を積んだものである。（三参照）



第1図　平将門の墓
（中央の破線はひび割れ）

二〇　牛をぬすんだ山うばは、牛に乗つて山のお（尾根）を通つてうばが嶽へ帰つた。それで今でもおの出つぱりに家を建てならぬといわれている。（一、三二参照）

二一　うばが嶽にむかし鉱山であつた小さい穴がある。この穴は温見に抜けていて、温見の方からにわとりを入れると小沢の方へ出、小沢の方からいれると温見の方に出る。

少年たちの話（八月十三日夜）

二二　むかし婆さんがあつた。ダンゴがすきで、ダンゴをこしらえていたら、一つがコロ〳〵ところがつていつた。そこで婆さんはダンゴを追いかけていつた。地蔵さんがあるので地蔵さんに聞いたら、地蔵さんは知らんといつた。またいくと、また地蔵さんがあつた。この地蔵さんに聞くと、この地蔵さんも知らんといつた。しかしいま鬼が来るから後にかくれていよといつた。

やがて鬼がやつて来た。人間くさい、人間くさいといつて、あたりを

杉原　西谷村聞書

探し、婆さんを見付けた。婆さんは鬼の家へ連れて行かれて、せんだくやかしきをさせられた。鬼の家には米一つぶをいれてかきまわすと米が釜一ぱいになるシャクシがあつた。婆さんはこのシャクシを使つて米をたいていた。

あるとき鬼がるすをした。その間に婆さんはシャクシをもつて逃げた。途中に川があつた。舟がつないであつたので舟に乗つて逃げた。やがて鬼が気がついて追いかけて来た。鬼は川の水を飲んで引き寄せたので、もうじきつかまりそうになつた。そこで婆さんはシャクシをもつて、こつけいなかつこで踊つた。鬼はおかしくて吹き出した。それで水も吹き出され、その間に婆さんは逃げて帰つた。

婆さんはそのシャクシで米をたいては金持になつた。宮本福美のぢいさんは、米一つぶで釜一ぱいになるシャクシが家にあつたが、誰かに借したら、もうもつてこないといつていた。

二三　かわたろう（河童）はきゆうりが嫌いである。きゆうりを食うたら水の中に沈まなくなつたからである。

二四　ある人が「やのきし」（地名）で道がわからなくなつて、どうしても帰れなかつた。他の人が通りかかつて、それは天狗にだまされているのだからといつて、なたのさやを借してくれた。それでのぞいてみたら、道が川になつて見えていることがわかつた。

二五　村の神様はいくさの神様である。自分が戦争に行くとき、子供を木の根にうずめていつた。そのるすの間はきじが来て子供にえさを与えてくれた。（三六参照）

二六　むかし村の人が熊を追つて行くと、熊はうばが嶽のほら穴へかくれた。中へはいるとうばがいたので、熊を出してくれというと、赤いたすきで熊をくくつてくれた。どうか殺さずに行つてくれといつたが、熊が動かないので殺してしまつた。すると夜中に山うばが来て、その家の牛をぬすんでいつた。（一、三五参照）

二七　村の人があずきをこいでいると、山うばが来て手伝をしてくれた。いいかげんこぐと消えてしまつた。（九参照）

二八　みつまの山でからすがなくと、村で赤児が生れる。たいていよくあたる。

二九　「かんばおき」（地名）でむじなが紳士にばけてでた。本戸の人が棒でなぐつたら河原の方へ逃げていつた。追いかけて行くと婆さんがはたけにいた。婆さんにここへむじなが来なかつたかときくと、婆さんは来ないと答えた。お前もかといつて婆さんを棒でなぐると、むじなになつて逃げていつた。しつぽをつかんで捕えた。

坪田惣衛門氏談（八月十三日）

三〇　明治以前に姓があつたのは次の三軒である。この三人が小沢のはえぬきで、他はこのわかれである。

宮本　平尾　坪田　（六参照）

三一　村に道場が三つある。

西派の道場　坪田氏宅
東派の道場　中山九氏宅
鯖江派の道場　谷畑音松氏宅

西派では毎月二十八日講がある。これは忙しい季節には二十七日夜、ひまな季節には二十八日朝おこなう。これを「おたいや」という。会場は同行（どうぎよう）のまわりもちである。ごはんを持寄り、おかずは会場の家で出す。

三二　坪田氏の裏のお（中尾という）は丹波の大江山に続いているという。山うばが牛をひつぱつていつたのは、このおであ

る。（二〇参照）

三三　むかし話のおわりのことばは「そもそも　そつきり　きのこわし。」なお武生市では「そうらい　そうらい　けつぶくろ、けつにふくろがあるものか。おわーり。」というそうである。

三四　お宮に桂の大木がある。神様が来て遊ぶ木である。

源済清氏のおばあさんの話（八月十四日）

三五　うばが嶽に山うばが住んでいて、はたを織つていた。山からしやくが流れてきたことがある。山うばのほらには熊が門番をしている。（一、二六参照）

三六　お宮にある三体の御神体のうち、不動さんはいくさの神様で、戦争のときには戦場へ出かけるので、お宮の戸があかない。川へ棄てられたのはやはりお産の神様で、女神である。（一八、二五参照）

三七　池の原に美しい小池がある。蛇が住んでいるという。

三八　ぶなの木の下などに山の神を祭る。山祭のとき酒などを供える。

三九　山の平地を平（ひら）という。全部田畠になつている。平の地名は次のごとくである。

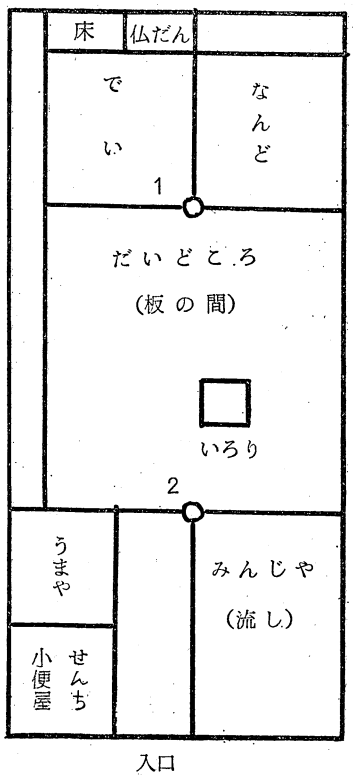
オクゴヨリ　デサゴヨリ　ムナヒラ
オオヒラ　ニシカツ　ヤノキシ
タンド（谷戸）　タノシマ（田の島）
ナカゼ　ナシノキ（梨木）　ミヤタケ
（宮竹）　オオバタ　シタジマ（下島）
オオムカイ　コニユウノ（小入野）
ビワガフチ　ワルワタセ（悪渡瀬）
イタガヒラ　カタヒラグチ　コウカダニ
（河加谷）　タナエ　オチアイ
デサガタヒラ　ナカガタヒラ
オクガタヒラ

四〇　中山九氏宅の間どりは第二図のごとくである。いろりの正座をヨコザ、そのむかい側をスエザ、横座の左をナベザ、横座の右をオトコジロという。（六〇参照）

いろりの上のあまをヒヤマという。二階をツシという。たての桁をウシという。

1 中柱

2 大黒柱



第2図　中山九氏宅間どり

（図中小便屋は小便座の誤）

下秋生にて

某氏（氏名失念）談

四一　猴尾谷は切り立つた壁になつていて滝がある。そこの天狗岩はむかし源平の戦があつた所である。今でも血が一日に三合まじつて流れるので、朝三時までは水を飲むなといわれている。

杉原　西谷村聞書

四二　平家が嶽という所には平家の一族がかくれていた。この残党たちは不動さんをきざんで山にまつつた。故に今でも山を荒すと不動の怒りにふれるといわれている。大野の坪江製材の人夫が伐採に行き山を荒したので、たる（滝）から落ちて死んだ人もある。またそのとき山なりがした。

四三　下秋生にも平家が平という所がある。平家がかくれていた。平家の人たちの妄念である平家がにがすんでいる。

四四　むかし戦争があつたと思われる地名に矢立、よびき（夜引）山などがある。また「くたらぎ」或は「ぶたらぎ」という所は、とりでがあつたといわれている。

四五　上秋生のこうち（高地）という谷に不動さんのほら穴がある。この谷は一間ほどに見えるので、一間の竿をわたすと、とどかない。二間あると思つて二間の竿をわたすと、やはりとどかない。

四六　こうちの下にばか岩がある。むかしべんけいが山の上からまくり落した。長さ四間、厚み九尺、はば二間ぐらいの岩である。この岩に穴があいている。これはべんけいがひざ（またはひじ）をついた跡である。

四七　はいぼうし峠の道を通る人で命をおとす人が多かつたので、明治のはじめ岐阜のいずしんという人が観音さんをつくつて、はいぼうし峠の下の広い場所に安置しておいた。

しかしどろぼうが通つて金めの物をはぎとつて行くので、向山の円山にまつつた。その後更に現在のごとくお宮の横にまつつた。

四八　下秋生のお宮の御神体はほうの木で出来ているので、下秋生の人はほうの木のげたをはかない。この御神体におみきをあげると、神体の顔が赤くなる。

四九　川の左岸に寺が島という所がある。ここは石器時代の遺物が出る。むかしここに寺があつたのでこの名がある。寺は明治初年に岐阜の方へ移つた。

五〇　夜上秋生へ行くと送り狼がついてくる　途中でころぶと出てきてくいつく。無事についたときは「ごくろうじやつた」というと帰る。

五一　下秋生はむかし中天井鉱山というのがあつて栄えた。盛んなときは芸者が三百人もいた。今でも下秋生の部落の宅地を掘るとユリカスの層が数尺ある。

山の上の平な所を今でも「おんまや」という。むかし藩の馬屋があつて、鉱石をはこぶ牛がつないであつた。鉱石をはこんだ道を牛道という。

むかしは川の左岸にふきやがあつて鉱石をふいていた。今は若生子で精錬している。

上秋生にて

長井つじさんの話

五二　この附近の地蔵さんに首のないのが多い。ばくち打たちが、地蔵の首をもぐと景気がよいというて取るのである。

五三　隣村伊勢では柿と笹がない。むかし神様が柿の木から落ちて笹で眼をついたからである。

五四　さぎちようのもえさしの木を家の前から後へ屋根ごしになげる。うまく投げると火事にならぬという。

五五　長井家は裕福だつたので、下秋生のすけえもんが何でも借りに来た。きゆうざ（久三）にないのは馬の角だけだといわれた。

五六　むかしは娘宿があつた。年頭のうちを宿にしていた。娘がはらむとかねつき

をした。

五七　ディ　分家
キビソマキ　ぬのでつくつた短い脚はん
ハンバキ　はばき、長い脚はん
カナワ　大きいごとく
タツケ　仕事のときはくもんぺ
カルサン　だてにはくもんぺ、だぶんとしていて馬のりが長い
バンカケ　ぬののふろしき
アブリキ　とうきび（上秋生）
ナンブキ　とうきび（伊勢）
トアワ　とうきび（中島）
タモソザケ　ゆいのうの酒

五八　カラミ　かなくそ
ユリカス　選鉱の残りかす
ナタネバク　黄銅鉱の黄色い箔もよう
スヤケ　石灰岩が水でとけて穴になつた所
ガマ　スヤケに同じ

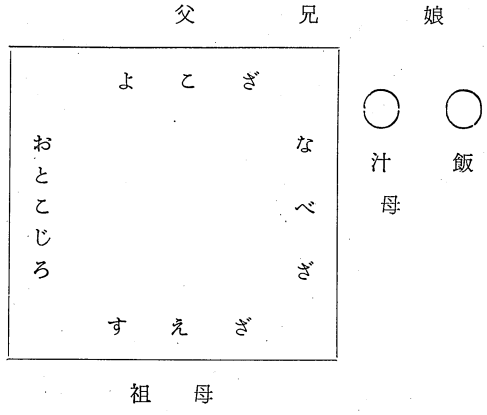
五九　旧六月十五日（いま七月十五日）はかいこ祭である。村じゆう拝殿に集つて酒をふんだんに飲み踊る。

踊りの種類。小原ぶし、新吉原、やんしき、べつちよせ、こくら、しんくさ、追分、やつちく、しつちよいちよい、じゆるはき、もぐり、まんざい踊り、おんたけぶし。

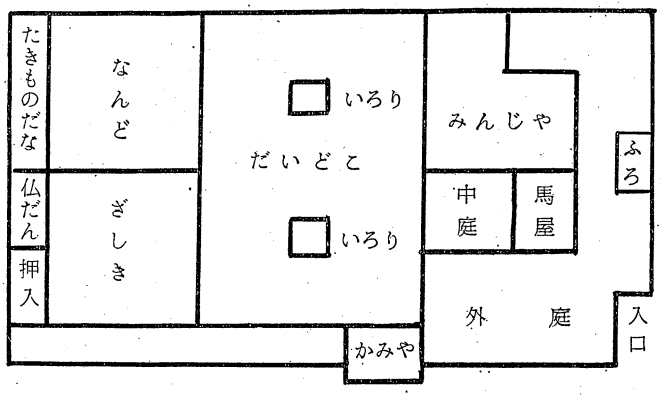
おんたけぶしの歌の一例をあげる。

「木曽のおんたけ　のりくらがだけ　またしなのの　こまがたけ」

六〇　長井助五郎氏の宅の間どりは第三図のごとくである。いろりの座の名称及び家族の位置は第四図のようである。（四〇参照）



第4図　いろりの座



第3図　長井助五郎氏宅